

答辞

本日は、長鶴学長をはじめ諸先生方のご臨席を賜り、皆様からの御懇篤なる励ましのお言葉を頂戴いたしましたこと、ならびに、このように盛大な学位授与式を催して頂きましたこと、看護学研究科の修了生を代表いたしまして、心より深くお礼申し上げます。

私は臨床経験を積んでいく中で、高齢化や過疎化が進行している地域で生活する高齢慢性心不全患者が、慢性心不全の悪化を予防しながらその人らしく在宅療養生活を送るために、私たち看護師はどのように患者と関われば良いのかと考え、この問いを解決すべく、母校である本学の研究科の門戸をたたきました。そして、それぞれの問いを解決すべく入学した、私たち修了生の学びが始まりました。

看護学研究として自身の問いを明らかにすることは、看護師として患者と関わるだけでなく、「数ある事象の中から事実を正しく抽出する力」を身につける必要がありました。そのために、自身の看護経験を振り返り、先生方の深い知見や、同期生との意見交換で、自身が行った看護の意味を導き出すことを繰り返し行いました。研究の計画を立てる際に、病棟看護師として慢性心不全患者に対する研究は数多く取り組まれていることが明らかとなり、どのように研究計画を立案すればいいのか、自身の問いは看護学研究として成り立つのか思い悩むことがありました。その時、訪問看護師の視点に着目するというご助言をいただきました。訪問看護師が在宅療養生活を支援している視点を明らかにして、病棟での看護に活用していくことで、退院支援や継続看護に役立つと自己の問題意識を整理することができ、研究計画を立案することができました。幅広い視点で自身の問いを明らかにすることの必要性を実感し、自身は病棟で実践している看護に限らず、あらゆる視点から病棟看護師としての意義や発展を導き出さねばならないと認識することができました。

研究に取り組むにあたり、研究者と病棟看護師の両立に思い悩むこともありました。その度に先生方から温かいお言葉や、同期の仲間たちと励ましあい、研究に取り組むことができました。全力で取り組んだ研究の日々が終わってしまうことに、今は寂しさを感じています。しかし、この2年間で学んだこと、取り組んだことを、看護の発展のために活かしていくことが自身の使命と考え、日々精進して参ります。

最後になりましたが、研究にご協力いただいた対象者の皆様、私たちを励まし最後まで温かくご指導くださいました諸先生方、研究へのご理解をいただいた職場の皆様、そして、健康に気遣い応援してくれた友人や家族に心より感謝申し上げます。

本学の益々の発展と、諸先生方のご健康ご活躍、ならびに在校生の皆様の一層のご健勝をお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

令和6年3月18日

看護学研究科修了生代表 黒木 祐子